

贈答歌編集の個性―『中務集』二類本の贈答歌

斎藤 由紀子

一・研究の目的と方法

物語や日記文学における作中贈答歌の表現の一致不一致と切り返しの特性は作品ごとに様々論じられてきた。

中で、高木和子氏は『伊勢物語』作中贈答歌を「冒頭部の合致」「対表現」「語順の逆転」「表現上の照応希薄」等、二首の照応関係を分類した⁽¹⁾。一作品全体の贈答歌の切り返しの一傾向をつかむ方法論である。こうした方法で様々な私家集を分析することで、歌人の個性を発見することもあるうし、一時代の詠法の規範を見出すこともできるのではないか。

『後撰集』には恋の部だけでも一〇五組の贈答が収録されている。恋歌を贈答として享受する機運が高まった時代である。これらを高木氏の方法論を拝借して分類を試みることで、一定の規範意識を見出すことはできないだろうか。さらに、今回は、その時期の代表的な女流歌人中務の贈答歌を取り上げて、「答歌」の個性の一端を探ってみたい。

ただ、諸本により歌の配列が異なれば、当然贈答歌も組み合わせが異なる。諸本の配列の特徴にも目を配る必要がある。また、中務の贈答歌は多く『信明集』にも収載されている。それらとも比較することで、今回は

二類本『中務集』に「編集された」贈答歌の特徴について述べる。

二・『後撰集』恋の部の贈答歌

『後撰集』の恋の部に収められた贈歌と答歌の自立語の一致を調べると、一組平均2.6語が一致している。三語以上が一致する贈答が五十六組を占め、全く一致しない贈答は二組だけである。以下用例中一致している語は□を付した。

自立語の一致率の高い答歌では、相手の用いた歌語や景物をそのまま用い、愛情の少なさや、不吉などを責めたり、相手の歌の内容を否定したり、はぐらかしたりするものが圧倒的に多く、一〇五組中四一首の答歌がこれにあたる。例えば

大輔がもとにまうできたりけるに、侍らざりければ、かへりて又のあしたにつかはしける
朝忠朝臣

いたづらに立帰りにし白浪のなごりに袖のひる時もなし
返し

大輔

何にかは袖のぬるらん白浪のなごり有りげも見えぬ心を

(後撰・恋四・八八四・八八五)

のように、相手の歌語の語順を変え、傍線部のように、反語(「何かは」や打消(「有りげも見えぬ」)を加えたものである。この詠み方ならば相手の用いた自立語をかなり多く一致させて詠むこともできる。或いは

いとしのびてまかりありきて

まどろまぬものからうたてしかすがにうつつにもあらぬ心地のみする

返し

うつつにもあらぬ心は夢なれや見てもはかなき物をおもへば

(後撰・恋四・八七七・八七八)

のように、相手の歌の後半にある歌語をそのまま尻取り式に自分の歌の前半に置いて、否定したり責めたりする読み方や、

人のもとにまかりて、いれざりければすのこにふしあかしてかへると
ていひいれ侍りける
よみ人しらず

夢ぢにもやどかす人のあらませばねざめにつゆははらはざらまし
返し

涙河ながすねざめもあるものをはらふばかりのつゆやなになり

(後撰・恋三・七七〇・七七二)

で、相手が涙の喩とした「寝覚めに払う露」に対して「涙河」を持ち出すように、相手の語を受けつつより高程度の景物や動作を通して愛情や苦痛を訴える詠み方も多い。これらは、内容としては相手に反駁しつつも、贈歌の表現上は寄り添う詠法といえる。

これらに対し、数は多くないが、『後撰集』恋の部の答歌に見られる他の三つの型を示しておきたい。

第一に、相手の用いた歌語を、別の意味に捉え直したり、掛詞のように同音異義語に置きかえたりする詠み方が四例ある。

女五のみに

君がなの立つにとがなき身なりせばおほよそ人になしてみましや
返し

たえぬると見ればあひぬる白雲のいとおほよそにおもはずもがな

(後撰・恋四・八八〇・八八一)

この贈答歌では一致している語は「おほよそ」だけであるが、「せめて人並みに」と訴える贈歌の「おほよそ」を、「通り一遍」の意に捉え直して

いる。さらに、贈歌の「立つ」に照応した「白雲の」の序詞を付すことで、「白雲のよそではないが、よそよそしくも通り一遍の思いを掛けてほしくはありません」という、返歌となっている。

第二に、相手の語をそのまま用いずに、対となるような表現によって切り返す詠みぶりが一一例ある。

女のもとにつかはしける

源中正

あふみぢをしるべなくともみてしかな 関のこなたはわびしかりけり

返し

しもつけ

道しらでやみやはしなぬ相坂の 関のあなたは海といふなり

(後撰・恋・七八五・七八六)

せうそこつかはしける女のもとより、いなぶねのといふことを返事に
いひ侍りければ、たのみていひわたりけるに、猶あひがたきけしきに
侍りければ、しばしとありしをいかなればかくはといへりける返ること
につかはしける

流れよるせぜの白浪あさければとまる いな舟 かへるなるべし

返し

三条右大臣

もがみ河ふかきにもあへず いな舟の心かるくも帰るなるかな

(後撰・恋四・八三八・八三九)

君を思ふ 心ながさは 秋の夜にいづれまさとそらにしらなん

(後撰・恋四・八四一・八四二)

では、贈歌の「秋／飽き」が来て遠のく「心」を、答歌は「秋の夜長」の
ような「心長さ」に変換して詠む。こうした答歌の例は一四例見られる。

『後撰集』恋の部に入集した中務の贈答歌は二組入集している。その内
の一组は「対表現」の巧みさが際立つ用例として先に挙げたが、次の贈答
は『中務集』には、贈歌と答歌の詠者の男女が逆に収載されている。(一)
内が『中務集』詞書である。

をとこのもとにつかはしける

中務(又、人)

はかなくて おなじ心になりにしを思ふがごとし思ふらんやぞ

返し

源信明(返し)

わびしさを おなじ心ときくからにわが身をすてて君ぞかなしき

(後撰・恋一・五九四・五九五)

中務 御二五〇・二五一 西一六六・一六七

男に心許した自らを「はかなし」とする女歌と「わが身をすてて君ぞかなしき」とより高程度の愛情を詠みかける男の返歌、という贈答歌としての整合性としては、勅撰集の組み合わせに軍配が上がるし、『信明集』も

などがそれである。他に、相手の用いた歌枕と同地域の別の歌枕を詠み込むことで贈歌との関係を保つものもこの系統に分類できる。後の節で取り上げる中務と信明の贈答も

源さねあきら、たのむことなくはしぬべしといへりければ 中務

いたづらに たびたびしぬといふめればあふには 何をかへんとすらん

返し

しぬしぬときくきくだにもあひみねばいのちを いつのよにかのこさん

(後撰・恋三・七〇七・七〇八)

と、単純な一語の対関係ではなく、「たびたび」と「しぬしぬ・聞く聞く」の繰り返しや、「何を」「いつの」疑問詞で揃えられた四句など、表現の上の対関係が張り巡らされたやり取りが入集している。

第三に、「連想」による詠み換えの技法である。相手の用いた歌語や景物から連想される、別の性質を取り上げて返す詠み方である。例えば

心ざしおろかに見えける人につかはしける ながきがむすめ

またざりし 秋は来ぬれどみし人の 心はよそになりもゆくかな

返し

源是茂朝臣

「はかなくて……」を「はじめてのつとめてかへりたる、女」という詞書で収載する(二)。続く

また人

さは水のこころをしれるきみならばつねよりまさるけふをとまし

返し

まさるらんみぎはのほどをしらねどもやどをばまづぞおもひいでつる

(中務 御二五二・二五三 西一六八・一六九)

も、冷泉家時雨亭文庫本及び御所本の「やどをばまづぞおもひいでつる」という答歌は、訪れるべき女の「宿」を思い出す男の側のものと考えるのが自然である。この答歌の四句は西本願寺本「よとのはまへそ」歌仙家集「よどむはまへそ」前田家本「まとをはまへそ」などの異文がある。古今集歌にもある「淀の沢水」という表現を踏まえれば、西本願寺本の本文で了解可能ではある。しかし、直前の詠者の入れかわりと考え合わせると、二類本二五〇～二五三番歌には、連続した詠者錯綜の疑いも残る。

こうしたことから察するに、現存『中務集』が依拠した詠歌資料は、贈答の形を規定するものではなく、編者の裁量によって贈答歌を編集する余地を残すものであったのであろう。『中務集』の一類本・二類本の成立については、直接体験過去の「き」が用いられた自撰部分と、他撰を伺わせ

る詞書や他者詠混入、意識的配列と錯簡などについて、様々に論じられてきた⁽³⁾。これらの指摘をふまえ、ここで取り上げている男女の贈答を含む麁の歌が未整理のまま残されていたものを、『中務集』諸本の編者が、自らの思う贈答歌の有り様へと編集したと仮定してみたい。以下、『後撰集』と比較して中務の他の贈答歌の傾向や、『中務集』諸本の贈答歌の編集意識の一端を探る。

三、『中務集』の贈答歌—二類本の配列の特性

『中務集』西本願寺本・御所本各独自所収歌を含めると三〇組の贈答歌がある。それらの贈答と答歌の自立語の一致率は一組平均1.7語で『後撰集』の贈答歌よりも低い。全く一致しない贈答は三組(御所本二組・西本願寺本一組)ある。この全く語の一致のない贈答に関しては、『中務集』編集の問題として後で考察するが、まずは、このようにごく少数の語一致で、いかにして中務詠は贈答を成り立たせているのかを確認しておきたい。

前節で取り上げた『後撰集』入集歌のような「対表現」が四例、同音異義語による切り返し三例、相手の歌語の別の側面を取り上げて詠んだり、そこから連想される他の歌語へと転じたりする詠みぶり四例、と、否定や反語によらない返歌が三分の一を占めている。この割合は前節で述べた『後撰集』における返歌の傾向と大きく異なる。『中務集』の贈答歌の答

和歌集』『秋風和歌集』等に中務詠として収載されている。表現の問題としても、一組目と二組目の贈答歌間に語句の一致は少ないため別日の詠と見ることに不都合はない。

しかし、二類本が、この四首を一続きの連続した男女の応酬と見て、男↓中務↓男↓中務の順に詞書をつけた理由を考えてみよう。この四首は、「濡る」から「色」、そして「風」へと相手の下の句の語を上句に据え、下の句には新たな趣向を用意する尻取り型となっている。隣り合う贈答歌は各一語を共有するのみだが、「恋の涙で濡れているというけれど、紅涙で色が変わってはいないでしょう」「その紅に萩は色づくけれど、私の胸には荒涼とした風が…」云々と、単に相手の表現に寄り添うだけでなく、そこに着想を得つつ、新たに秋の景物を提示しては相手をリードしあう返歌群といえる。御所本の詞書は、二首ずつの完結した贈答としてではなく、その四首の展開を一息に読ませられる。後半二首では、「萩」という景物に、相手の持ち出して来た「風」を受けて、敢えて「萩」を対えている。「萩」と「萩」は、同じ秋の花ではあり、「義孝集」の「秋はなほゆふまぐれこそただならねをぎのうはかぜはぎのしたつゆ」という詠は『和漢朗詠集』等に収載され、中世には類似歌も詠まれているものの、『拾遺集』時代までの贈答歌でこうした組み合わせで詠まれた例は管見の及ぶ所では『宇津保物語』の仲忠とあて宮の贈答に一例見られるだけである。

詠者の入れかわりだけでなく、歌語の面でも、二類本には、四首以上の

歌は、『後撰集』におけるそれよりも、能動的に歌語が選り取られていると言えようか。

そして、二類本『中務集』の配列は、その巧みさを際立たせる意図を推測したくなる箇所がある。

たれともなし、おとこ(又、ひと)

しぐれにもあめにもあらできみこふるわがころもでのぬるころかな

返し(返事)

こさまさるもみぢならねばぬるなれど色いろのふかさもしられざりけり

おとこ(秋いたく風吹く日、人に)

はぎのえのいろいろづくだにもあるものをころすくも風ふうのふくかな

返し(返事)

いねがてになるべきころの風ふうのをとはおぎの葉ならぬ身にもしみけり

(中務 御二四六〜二四九・西一九四〜一九七)

この四首は、御所本・西本願寺本共に一続きに収載されている。ただ、(一)内に示した西本願寺本の詞書は、二組目の贈答歌を「秋いたく風吹く日」と別日の贈答と捉えているのに対し、御所本にはその記述がなく一連の贈答のようにも読める。しかも、後半二首の詠者が入れかわっている。前田家本も三首目に「…ひとに」の詞書を付しており、また、三首目は『麗花

贈答の連関を意識していると思われる独自異文箇所がある。

をとこ

きみこふるなみだなみだのそでにみちぬればわれよりほかに人ひとやしららん

返し

人ひとこふるなみだなみだながらも身みにそひてうしろめたくももらすなるかな

をとこ

身のうへも人ひとのこころもしらぬまはことぞともなくねをのみぞなく

返し

きみだにもことぞともなきなみだをばいかにしりてかあはれとおもはん

(中務 御二六一〜二六四・西一六二〜一六五)

この四首の内、『信明集』は後半二首のみを載せる。□を付した自立語の一致から見れば、各二首ずつの独立した贈答の組み合わせとしても十分に理解できるが、これらを『中務集』の配列に並べて見ると、傍線部の「君」「人」「身」の対表現が巧みなローテーションで次々に繰り出されていることがわかる。しかし、二首目の一句を冷泉家時雨亭文庫本・御所本が「人こふる」とするのに対し、西本願寺本・歌仙家集本・前田家本は「我こふる」としている。そちらの方が「私が流した涙があなたの身に添って、あなたはその涙をよその人に漏らしたのですね」という歌意は理解しやすい。

にもかかわらず二類本は、あとに続く二首の「君」「人」との対応関係を優先するような表現となっているのである。

四、『中務集』／『信明集』の贈答歌の比較

御所本『中務集』は、『信明集』と共通する贈答歌八組、贈答歌の一首のみが共通しているもの三組が収載されている。それらの中には、詠者の男女が入れ代わっているものや、贈答の組み合わせが異なっているものがあることは前節でも触れたが、そうした用例の比較から『私家集』同士の編集方針の違いについて考えてみる必要もあろう。

平野由紀子氏は『信明集』が中務との贈答を中心に配列されていることを指摘し、『中務集』において信明は異性の贈答相手の一人に過ぎないのに対し、『信明集』においては、中務は異性の贈答相手として抜きん出た存在であり、歌集の物語化に寄与しているとされる⁽⁴⁾。これに対し、二類本『中務集』は、その歌がいつ、誰と、どのような場面で詠まれたかということは二の次にして、中務を中心とした機智の応酬を際立たせることを目的に、四首以上の一連の贈歌と答歌の語句の連関によって編集されている可能性を前節に続いてみていきたい。

さねあきら、としつきおほかりけれど、すこしをぞ

い。語句の一致の点から言えば、『信明集』の形が圧倒的に温当と言える。

しかし、二五七番歌と二五八番歌を並べると、傍線を付したように、初句は「かくて」「かからん」は指示語、「頼まぬ君」「思はぬ程」は互いの冷淡さを指す表現として揃えられている。そして、二五八番歌の下句の「つらきころ」が、二五九番歌上句に据えられるという先に見た尻取り式の展開を見せる。二六〇番歌は全く語の一致がない歌の一首であるが、「かひなきよりはたえてやみなん」という男の歌に対し、その夜離れの過程を嘆いてみせる女歌として一応答歌たり得ている。相手の歌語をそのまま用いるに留まらない中務の機智に富む詠みぶりを過信し過ぎのきらいもあるが、二類本編者は、未整理の詠歌資料を突き合わせて、なんとかこうした一連のやり取りを編んだのであろう。

『中務集』と『信明集』で、一首のみを共通として、全く別の贈答となっている例についても見ておこう。

おとこ

夜見よしかぜもすずしくなるころはこころにてまたじとやす

月あかく、花面白夜、女

あたらの月と花とおなじくはあはれしれらん人に見せばや

(中務 御二七八・二七九)

かくてなほうきよにいのちたへたればたのまぬきみもまたんとぞおもふ
をんな

かからんとおもはぬほどのゆめじにもつらきころは見えじとぞ思ふ
をんな

ありしよりつらきころのまさらなかひなきよりはたえてやみなん
をんな

はつかにてみそかならんもおもほえずのちやよそかならんとおもへば
(中務 御二五七・二六〇)

この一連の歌の内、西本願寺本には、御所本二五七・二五八番歌の異文歌「かからむとおもはん人のゆめぢにもつらきころを見えじとぞおもふ(二二六)」「かくてのみうき身のちおたへたればたのめぬよまでまたむとぞおもふ(二二八)」のみが、詞書なしに孤閨をかこつ歌群中に収載されている。また、『信明集』は、御所本『中務集』二五九番歌のみ「また、女(書寮部本「同じ男に、中務の君」)(二〇二)」の詞書で載せ、二六〇番歌に関しては「はやくこのかみの十日も過ぎなむはつかにてだにみそかなりやと(七七)」の返歌として別に配している。

御所本『中務集』の並びでは、初めの二首には共通しているのは句末の「とぞ思ふ」の部分だけで、西本願寺本『中務集』の編者には一対の贈答歌として認められていない。後半二首にいたっては、全く語句の一致がな

この、『中務集』では「女」の歌とされている二七九番歌は、源信明詠として『後撰集』(春下一〇三)に入集し、彼の秀歌として『三十六人撰』『古来風林抄』等に収載されている歌である。また『源氏物語』にも引歌として指摘がある。単に信明詠と中務詠が誤って入れ代っただけではない。『信明集』は、二七八番歌を独立して収載し(書寮部本一句「やみよし」)、二七九番歌に関しては

いきたるにあはねば

あたらの月と花とおなじくはあはれしれらん人にみせばや

返し

君ならでたれにか見せん梅の花色をかもしる人ぞしる

(信明 九九・一〇〇)

と、返歌に『古今集』(春上三八)の紀友則の歌が配されている。平野由紀子氏は、この友則詠が、信明歌と同内容で贈答としてかみ合っていないことを指摘した上で、集の「物語化」を図る「編者の遊び」としている。翻って、『中務集』の配列に目を向けると、二七九番歌の詞書は別日の詠とするが、これを、「闇夜もまた良いものです、私のことを待っていただけです。」と詠みかけた男の詠につがえられたものとして読めば、「あたらの…」の歌は「あなたは闇夜に私を待つようにおつしやっただけれど、

そういうあなたではなしに、せつかくの月や花は、同じことなら「あはれを知る人」と見たいものです。」という辛辣な返歌とも考え得る。男の歌に即座に反応するのではなく、記憶に留めおいたその歌に対し、格好の折をみて返した女の歌として、『中務集』編者は、『信明集』とは別の「物語化」を図ったのではないだろうか。

この『中務集』における贈答は、「あたらの…」が信明の秀歌として広まる以前に、『中務集』編者が未整理の襲の歌を推測により贈答歌として編集し、それが書写されてきたものであろうか。「あたらの…」に対し、ほぼ同じ意味の古歌を配した『信明集』の贈答歌と、詠者を取り違えつつも、全く語の一致のない歌同士を組み合わせて贈答の体を為した二類本『中務集』の贈答歌は、対照的な編集方針の産物といえよう。

五・結び

『後選集』における恋の贈答歌は、贈歌に用いられた語句や景物に寄り添う答歌を多く含む。そうした同時代の贈答歌の傾向の中で、中務の答歌は比較的限られた語句を一致させ、同音意義語や対表現、連想による歌語の展開によって贈答を成り立たせている。単純に相手の歌語をそのまま用いて返す典型からはみ出す中務の贈答歌のありように触発されてか、二類本『中務集』は、他本や『信明集』と比べて独自の贈答の形式を編集して

いるが、その中には、各歌の詠者や、状況がはっきりとわからないまま、

手探りで贈答歌として組み合わせ、配列したと思われる箇所がある。

『中務集』の贈答歌を他出のそれと比較して、問題点を羅列してきたが、それらを、単なる錯誤と切り捨てず、中務とその周辺の人々との先鋭的なやりとりを構成し直そうという試みであったという可能性を提示したい。

注

(1) 高木和子「伊勢物語の贈答歌」『女から詠む歌 源氏物語の贈答歌』青簡舎二〇〇八・五(『日本文藝研究』二〇〇五・九 初出)

(2) 『後撰集』番歌の異文歌が西本願寺本『中務集』番に載るが、こちらも『後撰集』と『中務集』で男女が逆転しており、『後撰集』の方が妥当と考えられる。

(3) 鈴木史真子「中務集の一研究」『国文』一九六五・一二 安藤太郎「御所本中務集の一考察」『東京成徳短期大学紀要』一九七一・一 秋間康夫「中務集の性格」『同朋大学論叢』一九八一・六 妹尾好信「第二類本『中務集』の成り立ちについての試論」『国語と国文学』二〇一〇・一 等

(4) 平野由紀子『信明集注釈』貴重本刊行会 二〇〇三・五 以下平野氏の指摘は同書による。

※ 和歌本文は『新編国歌大観』により歌番号を()内に示した。その際、御所本は「御」、西本願寺本は「西」と略した。